

## フランス語検定試験 DELF/DALF 試験官研修から見た タスク実行型の語学学習の考察

佐藤 三喜

キーワード：フランス語、教授法、タスク、DELF/DALF、語学検定試験、CECRL

### 概要

フランス語能力検定試験 DELF/DALF (Diplôme d'études en langue française/Diplôme approfondi de langue française) はフランス政府認定の語学能力資格試験である。DELF/DALF 試験の基盤となっているのが CECRL (ヨーロッパ言語共通参照枠、Cadre européen commun de référence pour les langues) の概念である。これは、外国語としてヨーロッパ言語を学習する際の習得レベルを示した共通ガイドラインで、2001年に欧州評議会<sup>1</sup>から発表されたものである。CECRLでは、「ある言語の使用者及び学習者がある環境や状況の中で幾つかのタスクを遂行すべき社会的行為者<sup>2</sup>」とみなしている。

筆者はアンスティチュ・フランセ東京で2015年3月に開催された DELF/DALF 試験の試験官養成研修に参加した中で、この試験が CECRL のタスク実行という基本概念を大きく反映したものであり、他の検定試験と異なる、学習者の「タスクの実行」能力の評価に重点を置いた試験方法である点に注目した。日本の口頭英語の教育方法と比較してみると、フランスにおける外国人向けフランス語教育法やフランス語能力検定試験の方法は、日本の語学教育法に大いに参考になるものである。例えば英語の口頭練習の場合、現在の日本の英語教育においては自分の意見を一方的に述べる練習をすることにどまる。一方でフランス語教育法では反論される設定のもとで自己弁護や自己主張をする練習が行われている。この理由から、日本の英語教育とは異なる特徴をもつこのフランス語能力検定試験を紹介していきたい。さらに、タスク実行型であるこの試験形式を、授業に応用するための具体的な演習方法を提案する。

本稿では、前半で DELF/DALF 試験の基盤となっている、CECRL の概念を述べる。次いで、タスクの実行能力を評価する事を目的とした試験方法の特徴を、具体例を挙げて示す。また比較外国語教育法の見地から、日本の語学教育法と比較しながらフランス語教育法の特徴を示す。後半ではタスク実行に焦点を当てるといった特徴的な DELF/DALF の試験を、日本でのフランス語学習の現場で具体的に演習として採り入れる方法を提案する。その利点や課題について考察する。

## はじめに

外国語の学習者にとって語学能力検定試験を受ける事は、自分の語学力のレベルを知るためだけでなく、強化すべき分野など語学力を上げるために必要な学習課題を示してくれる有益な指針となる。DELF/DALF 試験 (Diplôme d'études en langue française/ Diplôme approfondi de langue française) はフランス国民教育省の認定を受け、国立国際教育センターが実施するフランス語圏の諸国で最も普及しているフランス語能力資格試験である。この資格の B2 レベル取得者はフランス語圏の大学を受験する際に、大部分の学部においてフランス語試験が免除される資格でもある。筆者は元フランス政府給費留学生で留学中に DELF/DALF 試験の全レベル資格を取得した。この DELF/DALF 試験の試験官養成研修がアンスティチュ・フランセ東京 (旧東京日仏学院) で 2015 年 3 月に行われた。研修への応募資格は DELF/DALF の全レベル取得者であり、現在フランス語の教育に携わっている人である事で国籍は不問である。書類審査を経て筆者はこの研修に参加する機会を得た。研修期間は 2015 年 3 月 25 日～28 日の 4 日間。参加者は 20 名で、高校や大学、アンスティチュ・フランセ東京、同横浜、仙台アリアンスフランセーズといったフランス語教育機関でフランス語教師をしている人達である。その中で日本人は筆者を含め 2 名、他 18 名はフランス人であった。筆者は研修終了後に試験を経て、DELF/DALF 試験の試験官資格を取得した。今回の研修で得た知識と経験は日本の大学での英語やその他の外国語の授業の場で応用可能なものであると考え、本稿で紹介していきたい。DELF/DALF 試験というフランス語能力検定試験の方法から得られた幾つかの示唆を紹介し、英語やその他の外国語の授業方法への応用の可能性を提示したい。

研修に参加した筆者は、この試験が他の語学検定試験と比べて、幾つかの際立った特徴を持つ事に気がつく。まずは学習者の文法理解や語彙力といった一般的な言語能力の評価の他に、タスク (課題) の実行能力を評価しようとしている点である。なぜタスクを実行する能力が問われるのか? その答えは、DELF/DALF 試験の基盤となっている、CECRL (ヨーロッパ言語共通参照枠) の概念である、「外国語の使用者は与えられた環境の中でタスクを実行する、社会の行為者である<sup>2</sup>。」という考え方の中に見出される。もう一つの特徴は、学習者の自己弁護や自己擁護能力を評価している点である。受験者を、現実のフランス国内での社会生活の中で遭遇し得るような切迫した状況の中におかれたものと仮定し、即時に自己弁護や自己救済のための反論や説明をさせるという試験スタイルである。これは、例えば日本の実用英語の授業で良く見られる、「週末にあなたが何をしたか述べなさい。」というような、単純な一方的な叙述を求めるものとは異なり、学習者が日常生活の中で切迫した状況に置かれた時に、フランス人を相手にしてどのように自己弁護をす

るか、という想定で会話が設定されている。

本稿では、第1章で DELF/DALF 試験の基盤となる CECRL の概念を述べ、試験の特徴のひとつである「タスク実行能力」がなぜ重視されているのかという背景を示す。次いで具体的な試験例を挙げながら、学習者のタスクの実行能力をどのような試験方法で評価するのか、また、この試験のもう一つの特徴である、学習者に自己弁護させる状況設定をどのように試験に盛り込んでいるのかを考察する。第二章では、このタスク実行型であり、自己弁護能力を問う DELF/DALF 試験の方法が、日本における英語やフランス語などの外国語学習においてどのように応用できるかを、具体的な演習方法を提示しながら探る。

## 1. 学習者のタスクの実行能力に重点を置く DELF/DALF 試験

### 1. 1 DELF/DALF 試験と CECRL (ヨーロッパ言語共通参照枠)

DELF/DALF 試験の試験官養成研修で最初に学ぶのが CECRL の概念である。なぜならこの CECRL の概念に基づいて、級のレベル分けや、各レベルで必要とされる語学能力の到達目標が設定され、試験問題が作成されるからである。CECRL が作られた目的とその役割は次のように説明されている。

「CECRL は、EU 圏内における『加盟国間の更なる団結』を実現し、『文化分野において共通のアプローチをとる事によってこの目的を達成する』ためのツールとして、欧州評議会において作成された。その目的は第一に政治的なものである。すなわち、『外国人嫌い』問題に取り組む事によってヨーロッパの安定を強固にする事である。他者をより良く知る事で、言語と文化はその目的に貢献できる<sup>2)</sup>。」

EU は 2015 年現在で加盟国 28 カ国、公用語は 24 カ国語という多様な言語と文化を持つ国家の集合体である。ここで述べられているように、EU にとって言語や文化を通じた相互理解は、EU 統合の成否のカギとなる重要な要素なのである。特に、多言語主義と多文化主義を重要視する考え方が以下のように示されている。

「欧州評議会の言語部局が作成した、CECRL は、欧州評議会の言語政策を構成するひとつのツールとして、2001 年に発行された。その目的は、

- 多言語主義と多文化主義を奨励する。
  - 人々の移動や意見交換を容易にし、更に協力しあえるようにする。
  - 共通した原理に基づく、調和のとれた言語教育の概念を作る。
- である<sup>2)</sup>。」

EU 統合を背景にして作られた CECRL には、単なる言語教育の共通ガイドラインを示

すだけではない、EU 統合を推進するための大きな挑戦と意図が込められている。CECRL が「多言語主義を促進するためのツール<sup>3</sup>」である面が強調されている。

もうひとつ、CECRL の特徴となっているのが、タスクの概念と学習者の捉え方である。CECRL 本文の中で次のように説明されている。

「CECRL において考慮される学習アプローチは、従来の教授法の概念とは一線を画するものである。行動志向のアプローチ、タスクの概念、社会的行為者、そして能力、これらが基盤となっている。ここで優先される考え方は行動志向のものである。すなわち第一に、ある言語の使用者や学習者を、社会的な行為者として眺めることである。その行為者は(言語活動に限らない)様々なタスクを行うもので、そのタスクは所与の様々な状況と環境の中で、またある種の特定の行動分野の中で行われる。そこで行われる行動は一人または複数の主体により行われるもので、自分たちが持っている様々な能力を、ある特定の結果に到達する目的で戦略的に使う。そういった場合にタスクが存在する<sup>2</sup>。」

ここでは学習者が言語を学ぶ目的は、単に他者とコミュニケーションを図るという漠然としたものではない。学習者は、社会の中で様々な行動をしている「社会的な行為者」であり、実生活で生じるタスクを円滑に行うために、言語能力を高める。それが学習目的なのである。EU 圏内に移動して来た学習者は、仕事をする、学校に通う、住居を探す、といった社会生活を送る、その言語の使用者でもある。彼らは、社会生活のあらゆる場面で生じるタスクに、その国の言語を使って取り組まなければならない切迫した立場にある。

CECRL においては、「単に会話をするためではなく、他者と共に行動するためにコミュニケーションをとる<sup>2</sup>」点が強調されている。

ここで言及されるコミュニケーションタスクは「言語的なタスクだけではなく、社会的行為でもある<sup>2</sup>。」と明示されている。そのため CECRL においては、コミュニケーション言語能力とは以下のような能力を指している。

「コミュニケーション言語能力とは：

- 言語能力：語彙領域とその適切な使用、発音、構文、文法的な正確さなど
- 社会言語能力：挨拶の決まり事、慣例、社会規範
- 言語運用能力：発言の論理構築、一貫性、まとまりがある

これら3つの能力の他に、文化的能力がある。これはその言語が話されている国やその国の文化について知っておくべき知識であり、この文化的能力なしには、正しいコミュニケーションは成立し得ない<sup>2</sup>。」

確かに、単に相手と会話が出来れば良いのであれば、語彙や発音といった言語能力があれば、やりとりはできる。しかし、あるタスクを実行するためには、相手に行動を促すよう、相手を説得する必要がある。それには言語能力だけでは不十分であろう。社会言

語能力と定義されている、社会規範にのっとった挨拶やアプローチを使う事が出来て初めて、相手は自分の話を聞いてくれるだろう。また、一貫性があり、論理構築がなされている話をするための言語運用能力も、相手を説得し交渉を成功させるために必要不可欠な能力である。後に紹介する DELF/DALF 試験の作文問題では、評価基準の中に「社会言語面での評価」というものがあり、文章を書く相手や状況にふさわしい言葉使いがなされているかどうかという基準で採点している。

## 1. 2 試験の具体例から見る DELF/DALF 試験の特徴

学習者を「あるタスクを実行する、社会の行為者<sup>2)</sup>」とみなしている CECRL の概念にのっとり、DELF/DALF 試験の中で実際にどのように学習者を評価しているのかについて、試験官研修の中で演習として取り上げられた試験の具体例を挙げながら見ていこう。

### 1. 2. 1 口頭試験に見られる DELF/DALF 試験の特徴

▶ 職場の送別会について上司と話し合うという設定での口頭試験 (B1 レベル、試験時間：約 5 分)

受験生への指示は以下のようなものである。

「あなたの職場に近々退職する人がいるので、送別会を開く事になりました。あなたは、職場での持ち寄りパーティーをしたいと思っていますが、上司はレストランでの会食が良いと主張しています。あなたの提案が上司に受け入れられるように交渉しなさい<sup>2)</sup>。」

DELF/DALF 試験には A1、A2、B1、B2、C1、C2 と 6 段階のレベルがある。A を初歩レベルの言語使用者、B を自立した言語使用者、C を熟達した言語使用者と分類している。この試験で要求されているタスクは、送別会の計画を上司と共に進める事である。研修では、実際の口頭試験の様子をビデオで見ながら、評価シートを元に受験生を採点するという演習が行われた。

この試験問題で特徴的なのは、学習者の提案に対して、相手が反対しているという状況設定である。学習者は、送別会を職場での持ち寄りパーティーにしたいと提案する。これに対して上司役の試験官は、「退職という節目の時なのだから、盛大にレストランで会食をする送別会にした方が良い」、と真っ向から反対している。そうなる学習者は、自分の提案を何とか正当化しなければならない。学習者は、「退職する本人が持ち寄りパーティーを希望している」事や、「職場で行う方が、参加者の都合を合わせやすい」、など、必死に自分の提案の妥当性を訴えて、上司の意見を変えようと試みている。結局この上司は最後まで、レストランでの会食という意見を曲げなかった。一方、学習者も一歩も譲らず最後まで持ち寄りパーティーを主張し続け、試験時間が終了となった。

なぜ試験官が学習者の提案に反対する状況設定になっているのか？その理由はCECRLの「共通能力レベル—自己評価表<sup>4</sup>」を読むと理解できる。この表の中では、「理解する（読解、聴解）」、「話す」、「書く」という分野について、A1、A2、B1、B2、C1、C2のそれぞれのレベルで、学習者に求められる能力が具体的に説明されている。B1レベルでは「自分の意見や計画について、その理由や説明を簡単に述べる事が出来る<sup>4</sup>。」と定義されている。つまり、B1レベルでは、自分の提案を述べるだけでなく、その理由も説明出来ないといけない。この点を評価するために、試験官はあえて学習者と反対の意見を述べて、学習者が自分の提案の根拠を主張しなければならないように仕向けているのだった。

この試験を観察していると、学習者にはタスクを実行する能力が求められているのだが、B1以上の中級レベルになると、さらにそれに加えて、自分の提案に相手が反対している場合に論理的に提案の理由を示す、という説明能力が求められていることがわかる。つまり単に意見を述べるのではなく、その意見の根拠となる理由を説明し、自分の意見を擁護できるかという点も評価されるのである。このような、自分と反対意見を持つ相手に対して話すという状況設定は、日本の英語教育の現場で行われている口頭練習には見られない特徴と言えるだろう。日本の外国語教育における会話の授業では、「何々について説明しなさい。意見を述べなさい。」というような、一方的に叙述をさせる、いわゆるプレゼンテーションの口頭練習はある。しかし、自分と反対意見を持っている相手に対して根拠を論理的に示して、自分の意見を擁護する訓練はほとんどなされていないように思える。

とりわけ日本のような単一民族国家で、以心伝心や調和を重んじる国民性の中に暮らしていると、相手と意見が真っ向から対立する状況に出くわす事は珍しいかもしれない。そんな日本人である私たちにとっては、自己弁護をせよと言われてもピンとこないし、必要を感じないかも知れない。しかし、EU圏では事情は全く違って来る。言語も、民族も、宗教、習慣も違う人達が同じ土地に暮らしていれば、意見の相違や衝突が起こるのは当然であろう。そんな環境で生き抜くためには、自己弁護する能力や、自分の主張を、理由を示して論理的に話す能力が必要不可欠となる。これらの能力を身につけて初めて、学習者は「自立した言語使用者<sup>2</sup>」、「サバイバルレベル<sup>2</sup>」であるB1レベルに到達するのである。

この口頭試験から、DELTA/DALF試験の2つの特徴が見えてくる。まずは、タスクを実行する能力を評価している点である。このタスクは一人で行うのではなく、相手と交渉し、説得するという相互関係のもとに成立するタスクである。もう一つの特徴は、自己弁護をする能力を評価している点である。

別の試験例を見てみよう。

➤ 列車内での車掌との会話という設定での口頭試験(B1レベル。試験時間：約5分)

受験生への指示は以下のようなものである。

「あなたは切符に刻印をしてから乗車しなければいけない事を知らずに、列車に乗りました。そこへ車掌(試験官)が切符を検札にやってきます。刻印されていない切符を見た車掌はあなたに罰金を要求します。罰金を払わなくてもすむよう、車掌と交渉しなさい<sup>2</sup>。」

この試験問題においても、特徴的なのはやはり状況設定である。ヨーロッパでは切符に刻印しないで列車に乗り込むのは、理由はどうあれ無賃乗車とみなされる。罰金を払って当然の状況である。学習者は、明らかに不利な状況の中で自己弁護をしなければならない。そんな状況にあっても、学習者は自己擁護をし、与えられたタスクを実行する事が要求される。学習者の能力を評価する際に、自己弁護する能力があるかどうかという点が相当重視されている事がわかる。また、評価するのは言語能力だけではなく、社会言語能力、言語運用能力、文化能力を含めたコミュニケーション言語能力を評価している。

以下が、ビデオ撮影された実際の口頭試験における、試験官と受験生とのやりとりである。

試験官(車掌):「この切符は刻印されていませんね。列車に乗る前に切符に刻印をする事は知っていますよね。なぜ刻印しなかったのですか?」

受験生:「外国人なので、切符の刻印の事を知りませんでした。」

車掌:「外国人だからといって何でも許されるわけではありません。刻印機はホームのあちこちにあるから見落とすわけではないでしょう。規則に従って、罰金を払ってもらいます。」

受験生:「学生なのでお金がありません。罰金を払えません。」

車掌:「お金がないのを理由にすると、浮浪者と学生はこれだから手に負えませんね。」

車掌役の試験官は真に迫った演技で、かなり厳しい口調で学習者を咎めている。実際、このビデオを研修教材として選んだ研修講師は、この試験官の対応の仕方はかなり演技過剰であり、受験生に対して厳しすぎる面があるとコメントしている。とはいえ、受験生は試験官に気圧される事なく、果敢に反論を試みている。この受験生は欧米の学生であったので、自己主張や自己弁護をする事には慣れていたのであろう。もしこれが海外経験の全くない日本人が受験生であったら、果たして反論することが出来ただろうか。このような試験をクリアするためには、日本人学習者にとっては、言語能力を訓練するだけでは不十分であろう。学習する言語の話されている国の文化や習慣、メンタリティーを知り、それに適応していく必要がある。この能力こそ、CECRL の中でコミュニケーション言語能力の要素のひとつとして定義されている、「文化的能力<sup>2</sup>」に相当すると言えるだろう。その説明にあるように、「その言語が話されている国やその国の文化について知っておくべき知識であり、この文化的能力なしには正しいコミュニケーションは成立し得ない<sup>2</sup>。」

文化やメンタリティーの面で、特に欧米と大きな違いがある日本人学習者にとって、この文化的能力は、コミュニケーション言語能力を高める上で大切な要素であろう。DELTA/DALF 試験で見られる、自己弁護をさせるスタイルの試験を言語学習の演習に上手く採り入れることができれば、学習者の文化的能力の向上に効果的ではないだろうか。

### 1. 2. 2 作文試験に見られる DELTA/DALF 試験の特徴

作文の試験においても、学習者に要求されるのはタスクの実行である。入門レベルの A1 では、日常生活に直結したタスクが試験として出題されている。以下のような出題例がある。

- 1) バカンス先から友人に絵葉書を書く。
- 2) 映画関係のイベントの参加申込書に記入する。

試験内容は、口頭試験と同様にタスクの実行である。これらは簡単なタスクではあるが、円滑な社会生活を送り、その国の文化に溶け込むために必要な能力が試されている。

A2 レベルでは、次のような出題がある。

- ▶ 友人からのメールを受け取る設定。メールの内容は、スキー旅行への誘いである。問題の指示は以下の通りである。「この招待に返事を書きなさい。友人の誘いには感謝するけれども、あなたは誘いを受け入れられません。誘いを断る理由を説明し、別の計画に相手を誘いなさい<sup>3)</sup>。」

ここで要求されているタスクは、CECRL で言及されている「コミュニケーションタスク」の意味を良く表している。コミュニケーションタスクとは、「言語的なタスクだけではなく、社会的行為でもある<sup>2)</sup>。」とあるように、言語能力だけでは実行する事が難しいタスクである。この試験における、試験官用の評価項目表を見ると、A1 レベルにはない二つの評価項目がある。一つ目は「社会言語能力」という項目で、「状況と相手にふさわしい言葉使いが出来る。一般的な手紙の書き出し、締めくくりの表現を使える<sup>2)</sup>。」という点を評価する。この「社会言語能力」は、CECRL 中にある、コミュニケーション言語能力を構成する能力のひとつである。二つ目は「相手に反応する能力<sup>2)</sup>」で、「感謝や謝罪、提案などを表現する簡単な手紙を書く事が出来る<sup>2)</sup>。」という能力を評価している。手紙の返事を書くという、一見するとありふれた作文問題なのだが、巧みな問題設定のお陰で、コミュニケーション言語能力の要素を網羅した試験問題になっている。

この試験問題のもう一つの特筆すべき特徴は、学習者に自己主張をさせている点であろう。相手の誘いに対して理由を述べて断るだけでなく、別の提案をするように指示している。つまり相手の誘いをあえて断り、自分の提案を主張しなければならない。誘いを断る

事だけでも困難を感じる日本人にとっては、到底達成不可能なタスクに思えるかも知れない。しかし別の視点から見ると、この自己主張の強さがフランスを含めたヨーロッパ人の文化、メンタリティーなのである。日本とは全く異質なメンタリティーや価値観を知る意味において、この試験問題は非常に興味深い一例である。先に述べた、学習者の文化的能力を高める演習としても有益であろう。

DELF/DALF 試験の出題例の考察を通して、この試験で評価しようとしている能力に関わる、三つの特徴が浮かび上がってくる。一つ目は、学習者に何らかのタスクを実行させようとする、タスク実行型演習問題であるという点である。又、ここで扱われるタスクとは、「言語的なタスクだけではなく、社会的行為でもある<sup>2</sup>。」コミュニケーションタスクである。つまり実際の社会生活の中で生じる、それを行う必要に迫られるようなタスクである。二つ目の特徴は、学習者が自己弁護、自己主張をしなければならない状況を設定して、その能力を評価している点である。特に注目すべきは、自分に不利な状況や、相手が自分と反対意見を持っている状況で、いかに自分を擁護し、主張を通せるかという能力を評価している点である。

三つ目は、社会言語能力を評価している点である。相手や状況に応じて、どのレベルの言葉使いをするか、あるいは、慣習となっている挨拶の表現などを使っているか、といった、実生活に直結したスキルを評価している。

## 2. DELF/DALF 試験に見られるタスク実行型演習の言語学習の授業への応用

### 2. 1 DELF/DALF 試験を授業に応用するメリットと、英語教育法におけるタスク志向の教授法との比較

DELF/DALF 試験を授業に応用する事の第一のメリットは、タスクを実行する事を通して、その言語が使われる国での社会生活を疑似体験でき、実践的な力が身につく点である。語学の授業ではたいてい、文法や構文、語彙の習得など、言語能力の習得に重点が置かれる。又、教室という実生活の現場から離れた環境に置かれ、フランスから遠く離れた日本にいと、学習者は何のために学習するのかという学習動機を見失いがちである。実生活で起こるタスクを演習として行い、フランスの社会生活を疑似体験すれば、その言語を学ぶ目的意識や学習意欲は自然と高められると期待される。

さらに、DELF/DALF 試験では、フランスで問題が作成されるためだと思われるが、タスクや試験問題の状況設定には学習言語が話されている国の文化や習慣、国民性をのぞかせる要素が数多く見られる。その点で学習者の文化的能力の向上にも効果的であろう。

英語の教育法においてもタスク志向の教授法は提案されており、語学学習における、学習者にタスクを実行させる事の重要性が示されている。タスクベース・ランゲージティーチング (Task-Based Language Teaching (TBLT)) という方法においては、様々な提言がなされている。英語教育法に関するある著書の中で、TBLT は次のように定義されている。

「TBLT は、語学教育の教案の核として、タスクを使う事をベースとしたアプローチである。Willis (1996) ら、このアプローチの提案者たちは、これは Communicative Language Teaching の以下のような原理に基づいており、そこから発展した論理的なアプローチであると説明している。

- 実生活のリアルなコミュニケーションを含んだ学習活動は、語学教育にとって不可欠である。
- 意味のあるタスクを実行するために言語が用いられるような学習活動は学習を促進させる。
- 学習者にとって意味のある言語は、学習プロセスを助ける<sup>6</sup>。」

上述のように、英語教育においても、タスクを学習に採り入れることの有用性が示されている。ただし、そこで提案されているタスクの例を見ていくと、DELTA/DALF 試験で取り扱われているタスクとは性格が異なることがわかる。TBLT においては、例えばバカンスを計画するタスクとしては、飛行機の予約、ホテルの予約をするというタスクが提案され、大学入学の出願に関するタスクとしては、出願、学部長との交信、奨学金に関する質問、科目選択に関する質問、電話での登録、授業料計算と支払いをするタスクなどが提案されている。これらのタスクはすべて、一方的に何らかのタスクを実行することにとどまり、自分に反対意見をもつ相手を説得する、あるいは、自己弁護をしなければならないような状況設定にはなっていない。

このような英語教育法との比較から、DELTA/DALF 試験を応用するもうひとつのメリットが浮かび上がってくる。それは、自己弁護や自己主張の訓練として非常に良く出来た演習であるという点である。前述の TBLT で見たように、日本の英語教育の現場では、タスク実行型を含め様々な口頭練習が行われている。しかしその多くは、一方的にタスクを行う形やプレゼンテーションをする形式であり、自己弁護や反論をする演習というのはまれであろう。

通常 DELTA/DALF の口頭試験は、例えば B1 レベルの場合、3種類の試験で構成されている。

- ① 受験生が自分の事を話す、モノローグ形式の試験。
- ② 試験官とのロールプレイ形式の試験。あるタスクを行うために試験官と会話をし、会話の相手とやりとりする能力を見る試験。

③ 渡された短い文書をもとにあるテーマについて、短いプレゼンテーションをする試験。

自己弁護や反論をする能力は、主に②の試験の中で評価されている。

一人で自分の事話すモノログと比べて、相手を前にして自己弁護するのは、相手が納得するような根拠を示して反論しなければならない分、単なるモノログよりも難易度が高くなる。また、論理的である事も要求される。欧米人に比べて議論に弱いと良く言われる日本人にとって、一貫性があり、論理構築がされている話をする能力である、言語運用能力を磨くために、この種の演習は有効であろう。

## 2. 2 語学の授業への応用

1章で紹介した、DELF/DALF 試験の口頭試験の出題例を元に、フランス語の授業に取り入れた演習を提案する。

### 2. 2. 1 ペアワークを中心とした口頭練習 (A2 レベル学習者向け)

状況設定：

プレゼントされた洋服が自分に合わないので、別の商品と交換してもらうために服を持って店に行く。

口頭演習の指示：

「プレゼントされた洋服が自分に合いません。そこで、あなたは別の商品と交換してもらうために、お店に洋服を持って行きます。店員になぜこの洋服が自分に合わないかを説明し(サイズが大きい、小さいなど)、別の商品と交換してもらいなさい<sup>5</sup>。」

店員役のあなたはまずは、お客が持ってきた洋服はそのお客に十分似合うので交換する必要はない、とお客を説得してください。どうしても相手が交換したいと言ったら、相手にどんな服と交換したいか、服の種類や色の好みなどを尋ね、幾つかの服を相手に勧めて下さい。

- 1) ペアワークを行う前に、洋服に関する語彙や表現(服の名前や色など)を全員で復習する。
- 2) 学習者2人でペアを組み、一人が洋服を交換したいお客、もう一人が店員となって会話をする。(約5分)
- 3) クラス全員の前で二人でこの会話を演じる。(各ペアにつき3分)
- 4) 演習の状況設定についてのグループディスカッションを行う。

この演習の状況設定やタスクについて、

- ① 洋服をプレゼントされたが気に入らない時、あなたならどうするか？
- ② この演習問題を通して、フランス人の文化や国民性のどのような面が理解できるか

について、少人数のグループで討議した後、各グループの代表者が意見を述べ、クラス全員で議論する。(約15分)

この演習は DELF/DALF 試験の A2 レベルの出題例を参考にしたものである。ここで要求されているタスクは、自分の要求が通るように、自己主張をしっかりとすることである。別の商品と交換してもらうには、プレゼントされた洋服がなぜ自分に合わないかを、相手が納得するように説明しなければならない。又店員役の学習者に対しては、すぐに交換に応じないで、その洋服がお客に似合うと説得するようという指示が出されている。互いの意見が違うという状況設定を与える事によって、それぞれが必死に理由を考え出し、自己主張や自己弁護をする力を養おうという目的がある。

(4)の討議は、文化的能力の向上を目指した演習である。フランス人の価値観について考えさせる。

## 2. 2. 2 ペアワークを中心とした口頭練習 (B1 レベル学習者向け)

状況設定：

駐車禁止をとられそうになる車の運転者と警官の会話。

口頭演習の指示：

「あなたは病気で具合がとても悪い母親を車で病院に連れて行き、駐車禁止の場所へ車をとめます。病院から出て来た所に警官が現れ、駐車違反の罰金をあなたに課そうとします。駐車違反をとられないよう、警官を説得しなさい<sup>2</sup>。」

警官役は、駐車禁止のこの場所に車を停める事がどれほど危険か、又、周囲の迷惑になるか、などを車の運転者に説明し、罰金を払うよう説得しなさい。

- 1) 学習者2人でペアを組み、一人が警官、もう一人が車の運転者となって、会話をする。(約5分)
- 2) 次に、同じペアで、先ほど行ったこの会話を元に、シナリオを作成する。(約10分)
- 3) シナリオが完成したら、クラス全員の前で、二人でこの会話を演じる。(各ペアにつき3分)
- 4) この演習の状況設定や課されたタスクについて、
  - ①実際にこのような状況に置かれたら、自分だったらどんな態度をとるか?
  - ②この演習問題を通して、フランス人の文化や国民性のどのような面が理解できるかについて、少人数のグループで討議した後、各グループの代表者が意見を述べる。(約15分)

この演習は、DELF/DALF 試験 B1 レベルの口頭表現試験の問題を活用したものである。

(1)で警官役と車の持ち主役が会話をするのは、試験と同じ内容の演習である。その後、(2)で、二人でシナリオを作成するという演習になっている。シナリオを二人で作る過程で、自己弁護するためにどんな理由が挙げられるか、互いに意見を出し合う事ができる。それによって、より説得力のある自己弁護が生まれる事が期待される。また、警官役の言い分についても、学習者は駐車違反を正当化し、車の運転者を納得させるような理由を、落ち着いて考え出す事ができる。

(2)でシナリオを作るという演習を入れたもうひとつの理由は、作文をする事によって、(1)のやりとりで学習者が相手と話した際の自分のフランス語の間違いに気づき、それを訂正しより良い表現を見つける事を促すためである。

(4)の討議は、文化的能力の向上を目指した演習である。演習問題の指示や状況設定を観察する事により、1つの状況に対して日本人とフランス人でいかに捉え方が違うかをグループで議論し、フランス人の価値観や文化について学習者に考えさせる事ができる。

## 結論

DELF/DALF 試験を通して、フランスにおける外国人のためのフランス語教育において重要視されている、幾つかの能力が見えてくる。

一つ目は、タスクを実行する能力である。ある言語の学習者は「社会における行為者<sup>2)</sup>」とみなされているからである。EU 圏の社会に溶け込むためには、一人で、あるいは他者と協力してタスクを行う必要がある。そのため全レベルの口頭試験と作文試験は、何らかのタスクを行う設定で問題が出題されている。言語能力はそのタスクを行うために必要なツールのひとつではあるが、最終目標はタスクを行うことにある。

二つ目に重要視されているのは、自己弁護や自己主張をする能力である。様々な言語や文化、民族が混在するヨーロッパでは、自己主張は生き抜くために欠かせない能力なのである。又、自分の意見の根拠や理由を示して論理的に相手に訴えることも、相手を納得させるために必要となってくる。

三つ目はコミュニケーション言語能力である。CECRL においては、言語を習得するためには、文法や語彙など学問的な言語能力を身につけるだけでは不十分なのである。一つには、その言語が使われている社会の習慣や約束事に関する知識を持ち、状況に応じて使いこなす社会言語能力がある。次いで、論理的で一貫性のある話をするための言語運用能力。これは、二つ目で示した、自己弁護や自己主張をするためにも欠かせない能力であ

る。さらに、その言語が使われている国の文化についての知識や理解といった文化的能力もある。これら四つの能力があって、初めてコミュニケーションが成立するのである。

これら三つの能力の向上を目指す、DELFL/DALFL 試験を応用した学習方法は、様々な点で日本人学習者にとって有益であろう。まず、タスクを行うことによって、実践力が身につけられるのはもちろんの事、学習している言語が話されている言語圏での生活を身近に感じる事ができるため、学習意欲を高められることが期待できる。また、演習問題そのものが、その国の文化や国民性を知るための格好の材料に成り得る。演習問題に取り組みながら、その国の人達の考え方の一端を感じ、異文化を疑似体験できる、興味深い演習と言えるのではないだろうか。更に、自己主張をするのが苦手な多くの日本人学習者にとって、自己主張や自己弁護をしなければならない演習問題に取り組むことは、これまで訓練されていなかった能力を高め、バランスのとれたコミュニケーション能力を身につけられるであろう。

#### 参考文献及び注釈

- 1 欧州評議会とは 1949 年に西欧及び北欧の 10 カ国が加盟国の拡大を目指して創設した政治的・社会的分野における協力のための機構。本部はフランスのストラスブール。現在の加盟国数は 47 カ国。
- 2 DELFL/DALFL 試験官養成研修講義資料, 2015
- 3 フランス国民教育省ポータルサイト、EDUSCOL  
<http://eduscol.education.fr/cid45678/cadre-europeen-commun-de-reference-cecrl.html>
- 4 CECRL (ヨーロッパ言語共通参照枠), p26, 27
- 5 フランス国立国際教育研究所 (CIEP) サイト : <http://www.ciep.fr/>
- 6 “Task-Based Language Teaching”, in *Approaches and Methods in Language Teaching*, Cambridge University Press, 2001, pp.223.